広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第５号　2024　329－336

国内におけるオートエスノグラフィーの研究動向

田島　美帆・中坪　史典
（2024年10月９日受理）

Research Trends in Autoethnography in Japan

Miho Tajima, Fuminori Nakatsubo

Abstract: The purpose of this study is to review research trends in autoethnography by focusing on domestic autoethnography papers, which have been rapidly increasing in recent years, and to organize them in terms of why autoethnography was used. We believe that exploring the background of why autoethnography was used will clarify what can be achieved through its use. In this study, we conducted a close reading of articles extracted from CiNii Research using the term “autoethnography” and selected 39 for analysis. After examining the articles from the perspective of why they used autoethnography, we identified four characteristics: (1) opposition to concepts and norms circulating in society, (2) “visualization” of “invisible” existence, (3) recovery of meaning through reflection on one’s own practices and experiences, and (4) emphasis on the nature of the participants.

Key words: Autoethnography, Rebellion against concepts and norms,
Visualization of presence, Reflection on practice and experience, Positionality
キーワード：オートエスノグラフィー，概念や規範への反発，存在の可視化，実践および経験の振り返り，当事者性

Ⅰ　問題背景と目的

１．国内において広がるオートエスノグラフィー

近年，国内の質的研究の分野において，オートエスノグラフィーへの注目が高まっている。2024年３月時点で，国立情報学研究所が運営する学術情報ナビゲータのCiNii Research上で,「オートエスノグラフィー」,「自己エスノグラフィー」という語を用いて検索したところ，論文が初出された2003年以降の論文，博士論文，書籍等が151件ヒットした（重複を除く）。そのうちの87% にあたる131件は，2016年以降のものであり，さらに，2021年以降のものは73件で，全体の48%を占める。つまり，この数年で急激に増えていることがわかる。その要因はいくつか考えられるが，Tony E. Adams, Stacy Holman Jones, Carolyn Ellis らによる“Autoethnography: Understanding Qualitative Research”の全訳が『オートエスノグラフィー　質的研究を再考し，表現するための実践ガイド』として2022年に発行されたことが挙げられるだろう。それまでは，『質的研究ハンドブック３巻：質的研究資料の収集と解釈』（N. K. デンジン & Y. S. リンカン編，2006）や『質的研究法マッピング』（サトウ・春日・神崎編，2019),『ワードマップ 現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践』(藤田･北村編，2013）等の書籍において，質的研究法の一つとして紹介される程度であったが，オートエスノグラフィーに特化した書籍が国内において発行されたのは，画期的であったといえよう。また，同年，日本文化人類学会は，学会が発行する学術誌「文化人類学」において，「オートエスノグラフフィーで拓く感情と歴史」という特集を組んでいる。さらに2020年以降からは，オートエスノグラフィーに関連する書籍(沼崎, 2024, 澤田，2024，川上，2022，土元，2022，リーペレス，2020）や雑誌（石原，2023，中村，2020）等が立て続けに刊

行され，加えて，研究者らによるオートエスノグラフィーを学ぶ研究会の立ち上げ等もあり，オートエスノグラフィーという研究方法について具体的に論じられる機会が増えたことも挙げられるだろう。

２．オートエスノグラフィーとは何か

オートエスノグラフィー（autoethnography：以下，AE）とは，「社会科学において，研究者が自ら有する文化（own culture）を理解することを目的とした記述的研究の総称」（土元，2022，p31）であり，エスノグラフィーの中でも，「最も自由で実験的な研究アプローチ」（井本，2013，p104）であるといわれている。自分自身を研究対象にすることから，当事者研究とも重なるが，当事者研究の場合は，研究者が同じ属性をもつ協力者に対して行い，研究者自身の経験がデータとして入らないことが多い（沖潮，2013）。対して，AE は，自分の身体感覚，思考，感情に注意を払いながら，自分の生きられた経験を理解するために体系的な社会学的内省と感情的想起を繰り返しながら，自分の経験を記述するものである（エリス＆ボクナー，2006）。 具体的な記述の方法として，通常「私」という一人称の主語が用いられるのだが，しかしこれには注意を要する。個人的な経験を記述することが，すなわち AE であるというわけではない。国内の先行研究においては，井本（2013）による「AE とは，調査者が自分自身を研究対象とし，自分の主観的な経験を表現しながら，それを自己再帰的に考察する手法である」という定義の引用が散見されるが，「自分の主観的な経験を表現する」という点にフォーカスし過ぎたためか，自身の実践記述や過去の経験を思い出して語ることがすなわち AE であると単純に解釈されているような研究が，特に，2020年以前に見られる。

北村（2022，p191）は，自分の経験を記述した文章を AE たらしめる必要要件として，Adams &Herrmann（2020）を引用しながら，「【A】auto（自己性，主観性，個人的な体験），【B】ethno（集団や文化の信念，慣行，アイデンティティ），【C】graphy（記述，解釈，表現）の３つの要素がある」と述べている。つまり，【A】を用いて，【B】を【C】することによって，日記や自叙伝，自分語りとは一線を画し，AE においては，特に【B】が強調され，「文化【B】の自明性や抑圧性を文脈化するために，エスノグラファーの個人的な経験【A】が事例として用いられる（北村，2022，p191）」。「個人的な経験が社会文化に結合していることを可視化する（中村，2022，p264）」のが AE なのである。

このような特徴を持つ AE は，主に人類学，社会学，心理学，教育学等の分野において，研究の蓄積があり，扱われるテーマも，セクシュアリティ，いじめ，人種差別，摂食障害，病気，虐待，死別など様々である（北村，2022）。これらのテーマからわかるように，トラウマとなる体験や憎しみ，悲しみなどのいたって個人的な問題が取り上げられることが多く，およそ統計的なデータで説明できるものではない。かつて井本（2013，p109）は，AE について「自分を研究することの意義を正当化するのは，障害や病いの当事者研究などの部類に入らない限りは難しい」と述べている。しかし，前述の通り，AE は，この10年の間に急激に増えている。研究方法としては「形態が多種多様で手法としての一貫性に欠ける」「自己中心的でナルシスティック」「学術的な評価が困難」（井本，2013，p109）などの批判もある中で，なぜ，今，人々は AE を用いるのだろうか。なぜ AE を書かねばならなかったのだろうか。その背景には何があるのだろうか。

３．研究目的

以上を踏まえ本研究は，近年，急激に増えている国内の AE 論文に着目し，なぜ AE を用いたのかという視点で整理することによって，AE の研究動向を概観することを目的とする。なぜ，AE を用いたのか，その背景を探ることは，すなわち，AE が何を明らかにすることに適しているかという知見を提示することにつながる。

Ⅱ　研究方法

本研究では，国内における AE の研究動向を概観するために，次の手順で文献を収集し，選択した。

1　2024年３月１日に CiNii Research 上で，「オートエスノグラフィー」，「自己エスノグラフィー」という語を用いて検索し，重複登録されているものを除外して151件を抽出した。

2　分析対象の選定の基準として書籍，書評，リプライ，講演，学会発表要旨，雑誌記事，博論以外とし，101件を抽出した。

3　101件の論文について，問題の背景，研究目的，研究の対象，研究結果を Microsoft Excel に入力しながら精読し，前述の井本（2013）による「AE とは，調査者が自分自身を研究対象とし，自分の主観的な経験を表現しながら，それを自己再帰的に考察する手法である」という定義に則って，例えば，他者から採取したインタビューデータやアンケートの調査結果が分析対象の大半を占めているもの，加えて，研究目的及び AE を採用する理

由が不明瞭なものは分析対象外とし，39件の論文を抽出した。

4　39件の論文を，「なぜ AE を用いたのか」という視点で精査した。

Ⅲ　結果と考察

39件の分析対象論文を，「なぜ，AE を用いたのか」という視点で精査した結果，「社会に流通してしまっている概念や規範への反発」「不可視化された存在の可視化」「自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直し」「当事者性の重視」の４つの特徴を有することが明らかになった。ただしこの４つは，それぞれの境界が曖昧で，重なり合う部分がある。ゆえに，39件の論文は，４つの特徴のいずれかのみを有するというよりは，いずれかに主軸を置いている，という点で整理した（表１及び表２参照）。以下に，４つの特徴とその特徴に主軸を置く論文をいくつか紹介しながら説明する。

１．社会に流通してしまっている概念や規範への反発

自分の意思とは関係なく，すでに社会において流通しているカテゴリーに分類される，レッテルを貼られるなどして，個人の声が消されてしまうことへの抗議，あるいはカテゴリーから外れている人の存在を示し，カテゴリーの存在に異を唱えるなど，支配的な概念や規範に対しての反発を示すという特徴である。これに主軸を置く AE 論文は９件で，以下のものなどが挙げられる。

南（2023）は，近年の中国帰国者のアイデンティティ研究において，多様性が明らかにされる一方で，当事者たちの語り，生活世界，能動性が十分に捉えられておらず，「中国帰国者は大変」「中国残留婦人は家族を望まない」等，メディアに作られたストーリーやカテゴリーによって，当事者の実際の経験が蔑ろにされていることを，中国帰国者３世である自身の AE を通して明らかにしている。

大河内・菅・杉本（2022）は，日本語教師が日本語教師としてのあり方を見出していくプロセスを AE で記述している。その中で私的な経験にも触れており，子育てをする自分に対して「大変ね」と声をかけられることと，過去に妹の死を経験した際に世間から「かわいそう」という目で見られることに対して強い抵抗があったことを告白している。そして２つの抵抗に共通する点として，その経験が当事者にとってどのようなものかもわからないにも関わらず，「子育ては大変」「妹を亡くした可哀想な姉」というレッテルを勝手に貼られることによって，個人の葛藤や工夫，努力といった日々の多様な経験が不可視化されてしまうことを指摘している。これらの研究は，自分の意思とは関係なく，他者から勝手にカテゴリー化，あるいはラベリングされた経験を取り上げているが，カテゴリーがあることによって，カテゴリーの外に追いやられる人が存在することを訴えるのは，以下のものである。

自身も自閉症スペクトラム症（以下，ASD）である林（2018）は，メディアが取り上げる ASD 者は，健常者とは明らかに異なる特徴を有する，あるいは重度の身体機能不全を伴う重篤な者であり，働けないほどの身体の不具合がなく，意思の疎通もできる ASD 者への理解が遅れていることを指摘している。メディアによる偏った「表象」によって，理解されないことが積み重なっていき，やがて疲弊していく ASD 当事者の存在をうったえている。

松田（2016）は，性の多様性を示す「LGBT」というカテゴリーから外れる人の存在を示し，人の性のありようは，カテゴリーを遥かに超えて多様であり，多様な性を持つ人同士の関係は非常に複雑であることを示している。また，既存の表象や概念から解放されて自分を語ること，体系化された特定の知の枠組みを宙吊りにして語ることの重要性も指摘している。

冨安（2019）は，ゲイやレズビアンの親密性について語るときに，「性的か非性的な関係であるか」という二分法が暗黙のうちに前提となっており，二分法自体，異性愛中心社会の規範に基づいているものだと指摘している。ゲイやレズビアンが構築・維持する関係は，決して二分法では分断できないこと，二分法が設定されることで，研究のフィールドが性的空間などの特定の場に設定されてしまい，人が生きていく上で大切なことを見えなくしてしまっているのではないか，と語っている。

この他にも，「性同一障害」というカテゴリーから距離を置く者の性別移行や性別違和を描いている小西論文（2020），ステレオタイプの「関西人」として見られることで，自己及び他者認識の偏った枠組みが存在することを示している川口論文（2019）などが，同じ特徴を持つものとして挙げられる。これらの研究は，社会に流通している概念や規範の存在を改めて問い直し，それらが持つ前提に「待った」をかけ，揺さぶりをかける可能性をもっているといえよう。

２．「不可視化」された存在の「可視化」

自身の出自や経験を声にすることが困難で，その結果，その存在を，一定期間「不可視化」されてきた経緯を描いているのが特徴である。論文中には「不可視

表１　本研究における分析対象論文

	著者名	発行年	論文名	掲載誌名	巻（号） ページ	（※）４つの特徴			
						特徴１	特徴２	特徴３	特徴４
1	木下江美	2023	質的研究のグローバリゼーションと研究者のトランスナショナルな移動 ―日本とドイツにおける質的研究方法実践の経験を例に―	アジア文化研究所 研究年報	57 174-188			○	
2	南 誠	2023	オートエスノグラフィの実践と中国帰国者のアイデンティティの問い：個人史研究の可能性をめぐって	日中社会学研究	30 49-59	○			
3	大川 ヘナン	2023	「当事者」と『研究者』の関係を問い直す ―移動する『私』のオートエスノグラフィーを手がかりに―	異文化間教育	57 33-53				○
4	荒谷 航平	2023	理科教師の演技―若手中学校理科教師のオートエスノグラフィー―	科学教育研究	47 (4) 334-351			○	
5	大河内 瞳・曹 智穂 杉本 香	2022	一人の日本語教師が自らの教師としてのあり方を見出していくプロセス	言語文化教育研究	20 334-351	○			
6	吉川 侑輝	2022	『個別的なもの』の日常的編成	文化人類学	87(3) 461-479			○	
7	中井 好男	2022	流暢な音声日本語話者像におけるインターセクショナリティ	言語文化教育研究	22 27-37	○			
8	中村 平	2022	日本軍兵士の子と孫世代のトラウマのオートエスノグラフィ	文化人類学	87(2) 264-284		○		
9	北村 毅	2022	戦争の批判的家族誌を書く　―家族のヴァルネラビリティをめぐるオートエスノグラフィー―	文化人類学	87(2) 285-305		○		
10	石原真衣	2022	〈沈黙〉が架橋する	文化人類学	87(2) 206-223		○		
11	真鍋 祐子	2022	『非当事者』のオートエスノグラフィ	文化人類学	87(2) 243-263			○	
12	大川 ヘナン	2022	在日ブラジル人としての『私』の移動：オートエスノグラフィーから捉える存在論的移動	移民研究年報	28 79-89				○
13	堤彩奈・田中瑞穂 佐野愛子	2022	「ろう者になること」と「ろう教師になること」： あるろう教師のアイデンティティとビリーフの変容	母語・継承語・ バイリンガル教育 （MHB）研究	(18) 15-30			○	
14	中井好男・丸田健太郎	2022	音声日本語社会を生きるろう者家族の生きづらさ	質的心理学研究	21(1) 91-109		○		
15	中井好男	2021	私はコーダとして日本手話を継承すべきだったのか	言語文化教育研究	19巻 52-73		○		
16	李 欣晨	2021	中国における政策移民のオートエスノグラフィー ―第三世代の自己認識をめぐる考察	東北人類学論壇	20 23-41			○	
17	鈴木 ちひろ	2021	オートエスノグラフィー：『児童性的虐待についてのマルチプル・リフレクション―レイヤード・アカウントの提言』（Ronai 1995）をテキストとした、創作対話形式によるマルチプル・リフレクション	人間社会学研究集録	16 57-90		○		
18	高橋 勅徳	2021	新興市場でのオートエスノグラフィー：婚活市場において商品化される私	経済経営研究	3 1-31			○	
19	松本 哲平	2021	音楽家の自己に関するオートエスノグラフィー アウトリーチプログラムの省察を通して	駒沢女子短期大学 研究紀要	54 39-50			○	
20	片田 真之輔・大川 ヘナン なかだ こうじえんりけ	2021	共生／共創の多角的検討―1：違和感とフラストレーションを起点とした協同的オートエスノグラフィー	未来共創	8 (0) 145-175				○
21	濱名 潔	2020	複数担任クラスにおける新任保育者の子どもとのかかわりに対する意識変容プロセス ―オートエスノグラフィーによる日記の分析―	国際幼児教育研究	27 (0) 55-72			○	
22	小西 優実	2020	「性別変更の限界」を再考する：対話的オートエスノグラフィによる検討	解放社会学研究	(34) 34-82	○			
23	土元 哲平・小田 友理恵 サトウ タツヤ	2020	成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚：TAEステップを用いた理論構築	質的心理学研究	(19) 46-67			○	
24	藤谷 悠	2019	ハーフとひきこもりの部分的つながり 複言語・複文化性の原点回帰と「移動」概念の再定義	言語文化教育研究	17 (0) 339-359	○			
25	冨安 皓行	2019	現代日本におけるゲイの親密性の探求：性的／非性的な関係の二分法を超えて	共生学ジャーナル	3 26-53	○			
26	清水克博	2019	「実践的研究者として教師」の資質形成を図る過程についての検討 ：自己エスノグラフィーによる初任期の教育実践記録の分析を通じて	金城学院大学論集. 社会科学編	15(2) 23-41			○	
27	小川 さやか	2019	SNSで紡がれる集合的なオートエスノグラフィ　香港のタンザニア人を事例として	文化人類学	84 (2) 172-190			○	
28	川口 幸大	2019	東北の関西人　自己／他者認識についてのオートエスノグラフィ	文化人類学	84 (2) 153-171	○			
29	旗 康之	2019	裁量性のマネジメントによる職場風土の変容：病院事務部の組織エスノグラフィー	現代社会文化研究	68 31-48			○	
30	劉 昊	2018	在日中国人ニューカマーとしての『私』の成長物語：オートエスノグラフィーを手がかりに	日中社会学研究	(26) 78-91			○	
31	町田奈緒士	2018	関係の中で立ち上がる性 --トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討--	人間・環境学	27 17-33			○	
32	林 桂生	2018	勤労中高年ASD者のオートエスノグラフィー	大阪大学言語文化学	27 27-39	○			
33	小山 聡子	2016	ソーシャルワーク教育へのドラマの手法導入をめぐって：教員自身の変化	社会福祉	(57) 109-123			○	
34	近藤百玲	2016	主体的問題解決のための思考過程の解明の試み：自己エスノグラフィを通した探索的検討	教育論叢	59 19-34			○	
35	松田 博幸	2016	性の多様性とソーシャルワーク：性をめぐるオートエスノグラフィー	ソーシャルワーク 研究	42 (2) 114-121	○			
36	沖潮（原田）満里子	2016	障害者のきょうだいが抱える揺らぎ：自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し	発達心理学研究	27 (2) 125-136			○	
37	中島裕昭・花家彩子	2012	上演芸術の経験を分析するための方法：花家彩子によるオートエスノグラフィー	東京学芸大学紀要	64 37-45			○	
38	佐藤 智恵	2011	自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析	保育学研究	49 (1) 40-50			○	
39	松田 博幸	2010	ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？ ：自己エスノグラフィーの試み	社會問題研究	59 31-42			○	

（※）４つの特徴
特徴1: 社会に流通してしまっている概念や規範への反発、特徴2: 不可視化された存在の可視化
特徴3: 自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直し、特徴4: 当事者性の重視

表２　本研究における分析対象論文の研究動向

	特徴の内容	論文件数
特徴1	社会に流通してしまっている概念や規範への反発	9
特徴2	不可視化された存在の可視化	6
特徴3	自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直し	21
特徴4	当事者性の重視	3
合　計		39

化」「見えないマイノリティ」「サイレント・マジョリティ」などの言葉が使用されている。これに主軸を置くAE論文は６件で，以下のものなどが挙げられる。

中村（2022）は，戦後の日本におそらく多く存在していたにも関わらず，その存在を不可視化された「PTSD復員兵」の祖父，そして祖父の代から引き継いだトラウマを持つ私の生きづらさを描いている。中村は「自身の生きづらさは，個人に起因するものではなく，国や社会が生み出したものであることを分有するために書いた」と述べている。

中村同様，戦争によって家族にもたらされた暴力を描いているのは，北村（2022）である。北村は，日中戦争帰還兵である祖父の戦中の過酷な体験が，家族に向けられる暴力へと置き換えられ，それが父の代へとどのように引き継がれて再演されていったかを批判的家族誌というAEによって記述している。北村は，この批判的家族誌について「私の批判の本意は，個人批判ではなく，戦争が当たり前だった時代に，生活世界に持ち込まれた軍隊の流儀や戦争絡みの習慣がいかに家族を蝕んできたかを例示し，暴力を再生産する文化と社会構造へとその切っ先を向けることにある」と述べている。中村（2022）も北村（2022）も，批判の矛先を，個人の背景に広がっている国，文化，社会構造に向けていることを明記しており，個人的な経験が社会文化に結合している（中村, 2022）ことをAEによって可視化している。

石原（2022）は，アイヌの出自を持ちながら，「サイレント・アイヌ」として生きなければならなかった自身の経験から，アイヌの非継承性の歴史を描き出している。石原はこの歴史について「私を描くAEによってしか明らかにできなかった」と述べている。

中井・丸田（2022）は，それぞれが，ろう者の両親を持つ聴者（CODA: Children of Deaf Adults）とろうの姉弟を持つ聴者（SODA: Siblings Deaf Adults/Children）であり，聴者であるがゆえにマジョリティと認識されていながら，ろう文化と聴文化から影響を受けるというマイノリティの要素が隠れた「見えないマイノリティ」としての生きづらさを協同自己エスノグラフィーというAEによって描いている。

これらの研究は，声なき者の声の存在を示すために，AEを用いるしかなかったという点が共通しており，それによって，壮絶な体験が明らかにされている。

３．自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直し

先述の２つの背景は，いずれも生きづらさやトラウマとなるような壮絶な経験が主に扱われているが，ここで紹介するのは，分野や事象を問わず，自身の実践及び経験を振り返ることによって，意味を捉え直す過程を描いているのが特徴である。論文中には，「アイデンティティの変容」「資質形成」「能力の獲得」などの言葉が使用されており，特に教育分野における自身の変化に着目しているものが多い。これに主軸を置くAE論文は21件で，以下のものなどが挙げられる。

松本（2021）は，音楽家である自身が音楽教育のアウトリーチに関わった経験を，「社会との相互作用によって形成される自己」という視点から描いている。記述によって，アウトリーチ実践者の社会的自己とアウトリーチ実践には相関性があること，実践の省察をすることによって，音楽家としてのアイデンティティも変容していることを明らかにしている。

松本（2021）同様，アイデンティティの変容に着目しているのは，堤・田中・佐野（2022）である。堤らは，口話教育で育ったろう者が，ろう学校の教員となって口話教育とバイリンガルろう教育の両方の教育実践を経験する中で，ろう者としてのアイデンティティや，言語教育についてのビリーフをどのように変容させたのかを描いている。

濱名（2020）は，幼稚園の複数担任クラスにおいての自身の経験を振り返ることによって，当時，新人保育者だった私の意識変容のプロセスを，複線経路等至性モデリングを用いて分析している。

濱名（2020）同様，教師の初任期にフォーカスしているのは，清水（2019）である。清水は，実践者でもあり，研究者でもある自身を，「実践的研究者としての教師」と捉え，初任期においてどのように資質形成をしていくのか，その過程を描いている。

自身の実践を批判的に捉えようと試みたのは，中島・花家（2012）である。子どもを対象とする芸術教育実践者としての花家は，自身がもともとどのような演劇文化のコンテクストの中にあり，その背景をもとにどのような意図を持って演劇教育実践に関わろうとしたのか等を記述している。

AEは，「トラウマとなる体験や憎しみ，悲しみなどのいたって個人的な問題（北村，2022）」が取り上げられることが多いが，このように自身の実践や経験を捉え直すものも多数あり，特に教育分野のものは，

そのことによって，よりよい実践を目指そうとしていることがうかがえる。

４．当事者性の重視

そもそもAEは，自身の経験を記述するため，当事者の物語であることが前提にある。本項で紹介するものは，前述の「自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直し」に主軸を置く，とも捉えられなくはないが，当事者自らが語ることの意義を強調しているのが特徴である。論文中には，「当事者自身」「当事者目線」「当事者による視点」等の言葉が使用されている。これに主軸を置くAE論文は３件で，以下のものが挙げられる。

大川（2022）は，自身の国家間及び日本国内の移動経験を取り上げ，在日ブラジル人としての自分が，それぞれの移動にどのような意味づけをしていたのかを明らかにしている。大川は当初，ニューカマーとしての自身の経験を「研究される」立場であった。ところが，他者による自身の経験の分析の中では，仮名を与えられ，「私の知らない悲惨な私」が描かれていることに強い違和感を抱き，「描かれる当事者」と「描く研究者」の認識のずれを理解しようと試みる（大川，2023）。大川は，当事者と研究者の非対称的な関係性が生じる要因として，当事者は，自身の課題や問題をフルタイムで経験しているのに対し，研究者は，その様子をパートタイム的に観察していることを挙げている。そして，当事者に寄り添った研究をするためには，当事者と研究者のコミュニケーションをどのように成立させるかが重要であると述べている。

また，片田・大川・なかだ（2021）らは，あえて専門家ではなく，「教育制度や選抜に翻弄された人」「在日ブラジル人」「クィア沖縄人」というそれぞれの当事者性を前面に押し出して経験を記述することで，専門家が担ってきた「共生」が有する問題を明らかにしている。

AEの記述にあたっては，自己を客観視することからは逃れられず，これまで気づかなかった自分の感情や姿に直面することで傷つくこともある（沖潮，2013）。一方で，それは当事者でなければ接近困難な感情面にアクセスできる，とも言い換えられ，オートエスノグラフィーを通して，自身と深く向き合うことによって，癒しがもたらされることもあるという（大川，2023）。

Ⅳ　総合考察

本研究では，近年の国内のAEの動向を探るべく，「なぜAEを用いたのか」という視点によって論文を整理したところ，４つの特徴が挙げられることを明らかにした。研究方法を選択する際，過去にどのようなテーマで研究されていて，方法論としてどのような特徴を有しているのかを理解しておくことは重要である。AEについては，土元（2022）による方法論的志向の類型化など，すでに貴重な知見もあるが，何を明らかにすることに適しているのかという知見を提示できたことは，本研究の成果であると考える。また，AEを用いる際に，なぜAEでなければならないのかという点に，研究者自身が自覚的であることは，単なる主観的な記述に陥ることを防ぎ，他者や社会とのつながりを意識して描くことを後押しするのではないだろうか。それによって学術的にも耐え得るような質を担保することにもつながると考える。しかしAEは，先述の通り，「自由で実験的な研究アプローチ」であることが魅力には違いない。研究成果の形態として，「短編小説，詩，数々の創作，長編小説，フォト・エッセイ，随筆，日誌，アンソロジー，社（Ellis &Bocner，2000 p136）等が挙げられており，一般的な学術論文の形式では捉えきれなかった新しい人間理解（土元, 2022）を確立しようと試みているのである。その点については，学術か否かという二分法の枠におさめることは困難であり，議論の余地があるといえるだろう。

最後に，本研究の限界と課題を述べる。冒頭で，2024年３月時点で公開されている論文数に触れたが，その後，９月１日に同様の手順で検索したところ，論文数はさらに29件増えていた。このことからも，昨今のAEの広がりがうかがえるが，本研究では，３月１日までに公開されたものを対象としており，それ以降のものは分析の射程に入れていない。また，今回は，国内の論文に対象を絞ったため，海外の論文については触れていない。これらについても動向を探ることを，今後の課題とする。

【引用文献】

Adams, T. E. & A. F. Herrmann 2020. Expanding Our Autoethnographic Future. Journal of Autoethnography 1(1): 1-8.

荒谷航平（2023）理科教師の演技－若手中学校理科教師のオートエスノグラフィー－．科学教育研究．47巻４号．pp334-351

Ellis, C. & Bochner, A. P. (2000). Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Research as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln. (Eds.),

Handbook of qualitative research, second edition. Sage Publications, pp733-768

エリス＆ボクナー（2006）第５章 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者 N. K デンジン＆Y. S リンカン編 平山満義 (監訳) 大谷尚・伊藤勇 (訳)（2006）質的研究ハンドブック３巻 質的研究資料の収集と解釈．北大路書房．pp129-164

藤田結子・北村文編（2013）ワードマップ現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践．新曜社

藤谷悠（2019）ハーフとひきこもりの部分的つながり 複言語・複文化性の原点回帰と「移動」概念の再定義．言語文化教育研究．17巻．pp339-359

濱名潔（2020）複数担任クラスにおける新任保育者の子どもとのかかわりに対する意識変容プロセス－オートエスノグラフィーによる日記の分析－．国際幼児教育研究．27巻．pp55-72

旗康之（2019）裁量性のマネジメントによる職場風土の変容：病院事務部の組織エスノグラフィー．現代社会文化研究．68巻．pp31-48

林桂生（2018）勤労中高年 ASD 者のオートエスノグラフィー．大阪大学言語文化学．27巻．pp27-39

井本由紀（2013）オートエスノグラフィー．藤田結子・北村文編．ワードマップ現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践．pp104-111. 新曜社

石原真衣（2023）当事者を書く：専門家の死角とオートエスノグラフィ：言説の独占を解体し「語る主体」の権利を回復する．現代思想．第51巻第11号．pp134-145. 青土社

石原真衣（2022）〈沈黙〉が架橋する．文化人類学．第87巻２号．pp206-223

片田真之輔･大川ヘナン･なかだこうじえんりけ(2021) 共生／共創の多角的検討－１：違和感とフラストレーションを起点とした協同的オートエスノグラフィー未来共創．８巻．pp145-175

川口幸大（2019）東北の関西人 自己／他者認識についてのオートエスノグラフィ．文化人類学．第84巻２号．pp153-171

川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編（2022）移動とことば２．くろしお出版

木下江実（2023）質的研究のグローバリゼーションと研究者のトランスナショナルな移動－日本とドイツにおける質的研究方法実践の経験を例に－．アジア文化研究所研究年報．57巻．pp174-188

北村毅（2022）序《特集》オートエスノグラフィで拓く感情と歴史．文化人類学．第87巻２号．pp191-205

北村毅(2022)戦争の批判的家族誌を書く－家族のヴァルネラビリティをめぐるオートエスノグラフィー－文化人類学．第87巻２号．pp285-305

近藤百玲（2016）主体的問題解決のための思考過程の解明の試み：自己エスノグラフィを通した探索的検討．教育論叢．59巻．pp19-34

小西優実（2020）「性別変更の限界」を再考する：対話的オートエスノグラフィによる検討．解放社会学研究．34号．pp34-82

小山聡子（2016）ソーシャルワーク教育へのドラマの手法導入をめぐって：教員自身の変化．社会福祉．57号．pp109-123

リーペレス・ファビオ（2020）ストレンジャーの人類学－移動の中に生きる人々のライフストーリー－．明石書店

町田奈緒士（2018）関係の中で立ち上がる性－トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討－．人間・環境学．27巻 pp17-33

真鍋祐子 (2022)「非当事者」のオートエスノグラフィ．文化人類学．第87巻２号．pp243-263

松田博幸（2016）性の多様性とソーシャルワーク：性をめぐるオートエスノグラフィー．ソーシャルワーク研究．42巻２号．pp114-121

松田博幸（2010）ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？：自己エスノグラフィーの試み．社會問題研究．59巻．pp31-42

松本哲平（2021）音楽家の自己に関するオートエスノグラフィー アウトリーチプログラムの省察を通して．駒沢女子短期大学研究紀要．54巻．pp39-50

南誠（2023）オートエスノグラフィの実践と中国帰国者のアイデンティティの問い：個人史研究の可能性をめぐって．日中社会学研究．第30号．pp49-59

中井好男（2022）流暢な音声日本語話者像におけるインターセクショナリティ．言語文化教育研究．22巻．pp27-37

中井好男（2021）私はコーダとして日本手話を継承すべきだったのか．言語文化教育研究．19巻．pp52-73

中井好男・丸田健太郎（2022）音声日本語社会を生きるろう者家族の生きづらさ．質的心理学研究．21巻１号．pp91-109

中島裕昭・花家彩子（2012）上演芸術の経験を分析するための方法：花家彩子によるオートエスノグラフィー．64巻．pp37-45

中村正（2020）臨床社会学の方法（30）自由に生きるための知－オートエスノグラフィ・当事者研究・リベラルアーツと「私」－．対人援助学マガジン．第11巻第２号．pp21-32
中村平（2022）日本軍兵士の子と孫世代のトラウマのオートエスノグラフィ．文化人類学．第87巻２号．pp264-284
沼崎一郎監修･西川慧･リーペレスファビオ･中野惟文･包双月編（2024）多軸的な自己を生きる－交錯するポジショナリティのオートエスノグラフィ－．東北大学出版会
小川さやか（2019）SNSで紡がれる集合的なオートエスノグラフィ 香港のタンザニア人を事例として．文化人類学．第84巻２号．pp172-190
大川ヘナン（2022）在日ブラジル人としての「私」の移動：オートエスノグラフィーから捉える存在論的移動．移民研究年報．28号．pp79-89
大川ヘナン（2023）「当事者」と「研究者」の関係を問い直す－移動する「私」のオートエスノグラフィーを手がかりに－．異文化間教育．57巻．pp33-53
沖潮（原田）満里子（2013）対話的な自己エスノグラフィー 語り合いを通した新たな質的研究の試み．質的心理学研究．第12巻．１号．pp157-175
沖潮（原田）満里子（2016）障害者のきょうだいが抱える揺らぎ：自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し．発達心理学研究．27巻２号．pp125-136
大河内瞳・菅智穂・杉本香（2022）一人の日本語教師が自らの教師としてのあり方を見出していくプロセス．言語文化教育研究．20巻．pp225-247
李欣晨（2021）中国における政策移民のオートエスノグラフィー －第三世代の自己認識をめぐる考察．東北人類学論壇．20巻．pp23-41
劉昊（2018）在日中国人ニューカマーとしての「私」の成長物語：オートエスノグラフィーを手がかりに．日中社会学研究．26号．pp78-91
佐藤智恵（2011）自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析．保育学研究．49巻１号．pp40-50
サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編（2019）質的研究法マッピング 特徴をつかみ、活用するために．新曜社
澤田脩一（2024）自己エスノグラフィーから見た企業発展のプロセス－経営者と従業員の成長を中心に－．晃洋書房
清水克博（2019）「実践的研究者として教師」の資質形成を図る過程についての検討：自己エスノグラフィーによる初任期の教育実践記録の分析を通じて．金城学院大学論集．社会科学編．15巻２号．pp23-41
鈴木ちひろ（2021）オートエスノグラフィー：「児童性的虐待についてのマルチプル・リフレクション－レイヤード・アカウントの提言」（Ronai 1995）をテキストとした、創作対話形式によるマルチプル・リフレクション．人間社会学研究集録．16巻．pp57-90
高橋勅徳（2021）新興市場でのオートエスノグラフィー：婚活市場において商品化される私．経済経営研究．３巻．pp １-31
冨安皓行（2019）現代日本におけるゲイの親密性の探求：性的／非性的な関係の二分法を超えて．共生学ジャーナル．３巻．pp26-53
トニー・E・アダムス ステイシー・ホルマン・ジョーンズ キャロリン・エリス（2022）オートエスノグラフィー 質的研究を再考し、表現するための実践ガイド．新曜社
土元哲平（2022）転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー．ナカニシヤ出版
土元哲平・小田友理恵・サトウ タツヤ（2020）成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚：TAEステップを用いた理論構築．質的心理学研究．19号．pp 46-67
堤彩奈･田中瑞穂･佐野愛子（2022）「ろう者になること」と「ろう教師になること」：あるろう教師のアイデンティティとビリーフの変容．母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究．18号．pp15-30
吉川侑輝（2022）「個別的なもの」の日常的編成．文化人類学．第87巻３号．pp461-479